



卒論修論のための日本語の書き方

2011/2

森 信人

論文の構成

- ・ 序論(はじめに) 前段
- ・ 従来の研究:研究の位置づけ 起
- ・ 研究の手法(実験, 観測, 計算) 承
- ・ 結果のまとめ 承転
- ・ 考察 転
- ・ 結論(おわりに) 結

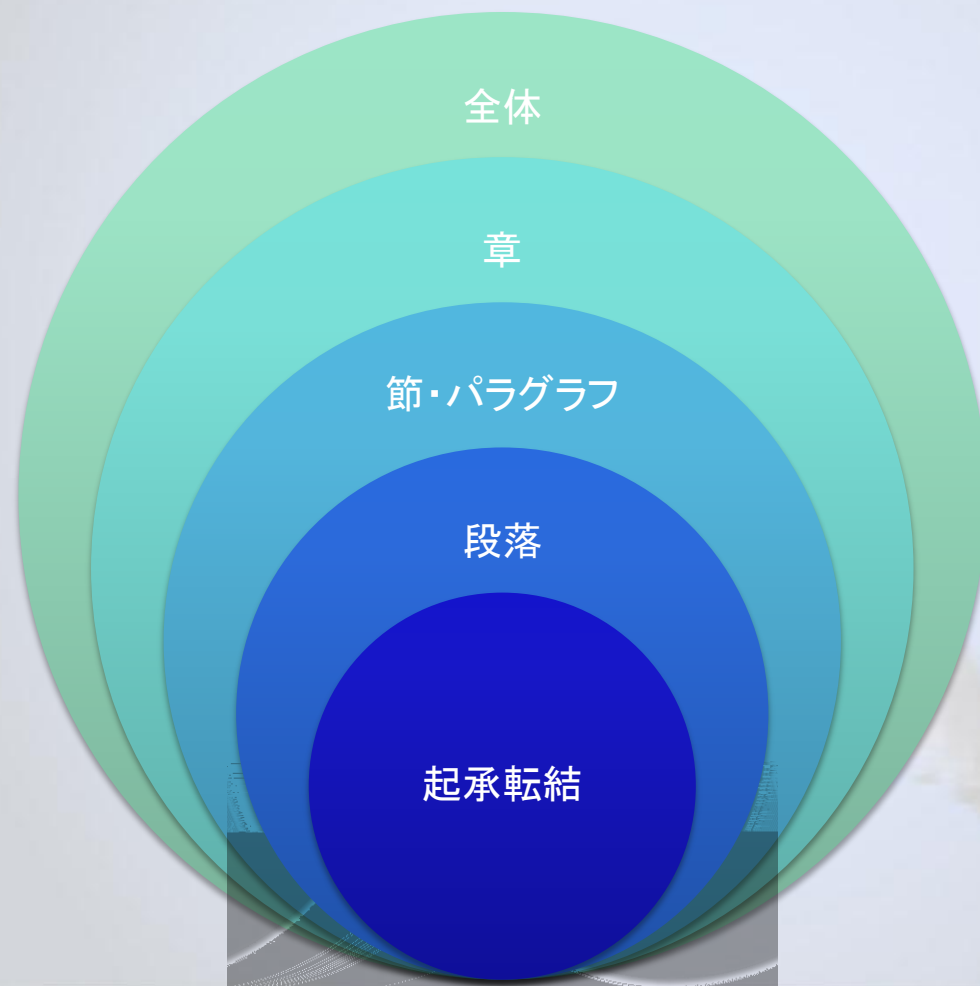





章の構成

- ・ 章は小節，小節はパラグラフ，パラグラフは段落分けされた文章群により構成される。
- ・ それぞれの章，小節，パラグラフ，段落は，
 1. 目標の文章 (起)
 2. 3へつなぐための準備(承): 場合によっては飛ばす
 3. 主体となる文章 (転)
 4. まとめの文章 (結)によりカスケード構造を持って構成される。
- 従って，段落は重要なので適当に改行しないこと


文章の構成





日本語について 1

- ・ 1文1文, 何のために意図する内容を考えて書く
- ・ 主語と述語をハッキリ書く
- ・ 時制を考えて書く
 - 実験は(もう終わったことなので)主に過去形
 - 結果の考察は(今書いているので)現在形
- ・ 他人の結果は参考文献として挙げる
- ・ 新しく出てくる記号, 単語はちゃんと説明する
- ・ 事実と意見を分ける
 - 思われる, 考えられる等
 - 事実と思うことを安易に曖昧にしていないか
 - 事実と言いきれないことを言い切っていないか
- ・ 多意複文→いくつかに分ける



日本語について2

- ・ 冗長な表現は避ける
 - 何々につきましては→何々については
- ・ 超複文, 延々と続く副詞節は避ける
- ・ 接続詞は, 上手く文章が流れるように使う
 - 段落最初に『ただし』とか『また』等は使用しない
 - まず, …… ついで, …… そこで, …… また, ……
- ・ 造語の多用は避け, 効果的に用いる

文例

- Reynolds Navier–Stokes

- Reynolds Navier–Stokes





文例：起承転結

- 近年，Reynolds平均型Navier-Stokes方程式を基礎式とした汎用コードを用いた数値シミュレーションが一般化され，このような数値コードを用いて平板周りの計算が行われている．しかし，現時点では，平板周辺に周期的に放出される大規模渦の再現性についてまだ十分には明らかにされていない．

図面

- ・ 図面は見やすく作る. カラーでもモノクロでも分かりやすい図面がベター
- ・ 図番号はむやみに振らない. 同じ種類の図はグルーピングして, サブキャプション((a), (b) 等)で違いを明確に
- ・ 読んだだけで内容がわかるようなキャプションを



その他注意

- ・ とりまとめのプロセスについて
 - いきなり全部まとめて持ってこない
 - ・ 構成(目次)について議論する
 - ・ 各章の草稿について議論する
 - ・ 各章の原稿について議論する
 - ・ 全体のバランスについて議論する
 - 他人に見て貰う
 - ・ M2に付いているB4人はM2に見て貰う
 - ・ そうでない人はD1もしくはM1に
 - ・ 研究分野が違う人の意見は重要
- 